

## 科学技術の時代における民主的な意思決定 ——リスク・無知・合意——

2019年8月1日(於:神戸大学)  
大妻女子大学社会情報学部 正村俊之

## 本報告の趣旨

科学技術の時代を迎えた今日、科学技術を活用するうえでいかに民主的な意思決定が必要か、そしてそのことがいかに困難かを「リスク、無知、合意」に関連づけて考察する。

## リスク社会とは

・現代社会がリスク社会である理由

- ①リスクの増大・多様化(e.g. 科学技術のリスク)。
- ②社会に潜在している問題をリスクとして把握し、リスク管理をつうじて解決する社会
  - ※N.ルーマンのリスク論
    - ・危険: 自己以外の誰か(何か)に起因する損害可能性
    - ・リスク: 自己の決定に起因する損害可能性
  - ※自然災害の位置づけ
    - 災害の認知と対策:「危険としての地震」から「リスクとしての地震」へ

・リスクの存在とリスク対策の相関性

「リスクがあるからリスク対策がなされる」のではなく、むしろ「リスク対策をつうじてリスクが定義される」

## リスク管理と知の問題

・リスク管理を構成する三要素

- ①リスク認知: リスクを認識すること
  - ②リスク対策: リスクの軽減策を講ずること
  - ③リスク・コミュニケーション: リスクに関する社会的コミュニケーションを行うこと
- 知の必要性: e.g. 安全基準の設定

・リスクと無知

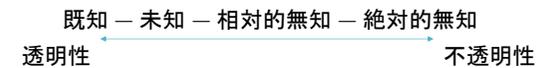
リスク: 出来事の不確実性(対象に対する不透明性)の一種  
→無知の発生: e.g. 安全基準の設定に伴う想定外

## 人間の知: 視点内在的な知

- ・知の役割  
世界に対する透明性
- ・特定の視点に依拠した人間の認識  
世界に対する透明性と不透明性  
※フレーム認識、ゲシュタルト知覚、
  - ①意識の主題: 透明性
  - ②主題の背景(意識の盲点): 不透明性
- ・視点の転換  
視点の転換による「透明性と不透明性」の関係変化

## 知の形態(Ⅰ): 知と(不)透明性

- ・知の四形態  
知は、既知、未知、無知に分けられる。  
無知は、さらに相対的無知と絶対的無知に分けられる。



## 知の形態(Ⅱ): 絶対的無知と相対的無知

- ①絶対的無知
  - ・知の要素を一切含まない無知  
→知らないだけでなく、知らないということも知らない  
→視点の転換によっても知りえない
- ②相対的無知
  - ・知に随伴する無知  
→何かを知ることによって発生する  
→視点の転換に伴って知りうる可能性

## 知の形態(Ⅲ): 未知と相対的無知

- 知と無知の混合物
- ①未知  
謎として知らないことが主題化されている  
→透明化された不透明性  
e.g.「宇宙に終わりはあるのか？」
  - ②相対的無知  
それ自体は知らないままになっている  
→透明性に伴う不透明性

## 近代科学と未知の螺旋運動

### (1) 19世紀における近代科学の制度化

- ・「専門家と素人」の分離  
   専門家集団としての科学者の誕生 → 大学における科学研究
- ・「事実(存在)と価値(当為)」の分離  
   価値判断から切り離された事実認識 → 認識のための認識
- ・「自然科学／人文社会科学」の分離  
   自然科学: 因果的説明  
   人文社会科学: 因果的説明＋意味的理解

### (2) 科学の発展

- 既知→未知→新しい既知→新しい未知→.....  
 ⇒ 知の螺旋運動(I): 未知の螺旋運動

## 科学と技術の関係

### (1) 科学と技術の異質性

- ・技術の性格  
   有用性(価値的・実践的な指向性)  
   →誰にとっての、いかなる有用性か?  
   →科学研究と技術開発の対照性
- ・20世紀初頭までの技術の発明  
   大学の外で営まれる個人的活動

### (2) 科学と技術の結合

- ・科学技術の誕生と発展  
   →社会的変化

## 科学技術による社会的変化

### (1) 境界越境的な知の成立

- ①自然科学と人文社会科学の境界越境  
   ・技術をどのように発明し、どのように利用するのか?  
   →自然科学的な専門知＋人文社会科学的な専門知
- ②事実と価値の境界越境  
   ・いかなる意味で有用な技術なのか?  
   →事実認識的な知＋価値志向的な知
- ③専門家と素人の境界越境  
   ・誰にとっての有用性なのか?  
   →専門的知＋素人的知

### (2) 相対的無知の拡大

- ・知の領域拡大(価値の開示)に伴う相対的無知の発生  
   →科学技術のリスク

## 科学技術のリスク I 相対的無知(不透明性)の多次元性

### ・三つの次元

- ①時間的次元  
   将来の出来事を正確に予測しえないことから生ずる不透明性
- ②自然的次元  
   自然のメカニズムを十分認識しえないことから生ずる不透明性
- ③社会的次元  
   人々の価値判断(意見やニーズなど)を十分把握しえないことから生ずる不透明性

⇒各次元の相対的無知として発生するリスク

## 科学技術のリスクⅡ 損害可能性の多様性

・価値(有用性)の毀損としての損害可能性

①生体的価値の毀損

e.g.健康リスク

②生活的価値の毀損

e.g.環境リスク

③社会・文化的価値の毀損

e.g.経済的リスク

⇒多様な現れ方をするリスク

## 科学技術のリスク管理と無知の螺旋運動

・リスク管理の発展

既知→相対的無知→新しい既知→新しい相対的無知→.....

⇒ 無知の螺旋運動

e.g.東日本大震災・福島第一原発事故

安全基準の設定(過酷事故対策の回避)→想定外の事故→早期帰還の優先(特定の価値選択)→除染による放射線線量の一時的低下と増大→健康被害

e.g.東日本大震災・津波被害

最大地震規模と最高津波高の想定に基づく防災対策→想定外の津波→安全性の優先(特定の価値選択)→高台移転と巨大防潮堤建設→生態系の破壊、観光・漁業の困難

## 社会の統治原理としてのリスク管理

・ビッグサイエンス時代のリスク管理

価値領域の開示と相対的無知の拡大

→リスク対リスク、価値間の対立

・多様な価値を踏まえたリスク管理

危機の対処原理から社会の統治原理へ

→民主的な意思決定の必要

## 民主主義の現在

(1)近代民主主義の限界

・20世紀前半の議会制民主主義

選挙に基づく利害調整型の民主主義

→1990年代以降、価値の多元化と政治参加への要求

・議会制民主主義:近代社会の機能分化した政治システム

1980年代以降における機能分化の変容

→議会制民主主義の空洞化(内部の外部化)、相対化、形骸化(外部の内部化)

(拙著『主権の二千年史』講談社)

(2)新しい民主主義の理論と実践

・討議民主主義論と闘技民主主義論

・ミニパブリックスと社会運動

## 二つの民主主義理論

### ①ハバーマスの討議民主主義論

- ・人々の平等な参加と理性的な議論  
→(規範手続きに関する)合理的・普遍的な合意の必要

### ②ムフの闘技民主主義論

- ・抗争の不可避性、抗争から闘技への転換、  
→異議申し立ての重視、社会動員に果たす情動の役割



## 二つの民主主義的实践

### ①ミニパブリックス

- ・無作為抽出や層化抽出によって選ばれた少数の市民が、専門家を交えながら討議を行い、討議決定を政治に反映させていく手法(討議型世論調査、コンセンサス会議、計画細胞会議など)  
→理性的な討論と合意の実現による政策への反映

### ②新しい社会運動

- ・自己決定や集合的アイデンティティ形成を目標にした社会運動(環境運動、人権運動、女性解放運動、消費者運動など)  
→運動自体を目的とし、集合的沸騰(集団的熱狂)の要素を内包



## 不合意の余地を開く合意のメカニズム(Ⅰ)

- ・合意のハバーマスの理解からの解放  
合意の拡大解釈

### ・合意の歴史性

- 「全員一致の原理」(古ゲルマン社会)、古代ローマ帝国(全体同意原理)、  
「多数決による合意」(中世キリスト教教会)

### ・不合意の余地を開き、それを表現する制度の重要性(ムフ)

- 不合意と合意の両立可能性  
→合意の相手・対象・方法

## 不合意の余地を開く合意のメカニズム(Ⅱ) 合意の相手

### ・誰の合意か？

- ①「我々」と「彼ら」との合意 : 全体的合意
- ②「我々」の合意、「彼ら」の合意 : 部分的合意 → 全体的不合意の可能性

### ・「我々(彼ら)」とは誰か？

- ①参加者:意思決定や意思表示に参加した人々
- ②当事者:参加者の母集団となる人々
- ③関係者:当の問題に関わるすべての利害関係者  
→参加者<当事者<関係者

※「我々/彼ら」と「参加者/当事者/関係者」の分析的な独立性

## 不都合の余地を開く合意のメカニズム(Ⅲ) 合意の対象

・何についての合意か？

### ①「問題の解決」に関する合意

問題解決型合意

→ 議会やミニパブリックスの政策決定

### ②「問題の発見・定義」に関する合意

問題発見型合意

→ 社会運動の意志表明

(環境問題、人権問題、女性解放問題、平和問題、民族問題等の発見・定義)

→ 問題解決の不都合の可能性

## 不都合の余地を開く合意のメカニズム(Ⅳ) 合意の擬制

・合意はどのように形成・利用されたのか？

(i) 実体としての合意

何らかの条件や方法に基づいて現実的に成立した合意

→①偶発的合意: 一定の偶発的条件(e.g. 成員の同質性)のもとで生まれた合意(e.g. 古ゲルマン社会)

②理性的合意: 理性的議論を通じて生まれた合意(e.g. ハバースマス、ミニパブリックス)

③心情的合意: 共感的心情や社会的同調性によって生まれた合意(e.g. 社会運動)

(ii) 擬制としての合意

実体としての合意を拡張解釈することによって、合意が(実際には成立していないにもかかわらず)成立したとみなされた場合の合意

①数値的合意

数値的根拠に基づいて拡張解釈された合意(e.g. 多数決、ミニパブリックス)

②象徴的合意

部分を全体のシンボルとして象徴的に拡大解釈された合意(e.g. 社会運動)

⇒ 擬制のメカニズムによる合意の省略

## 纏め

・科学技術のリスク管理

価値領域の開示に伴う無知の螺旋運動

・リスクへの対処

多様な視点に基づく民主的な意思決定

→ 相対的無知の、知への転換(新たな相対的無知の発生可能性)

・民主的な意思決定としての合意の見直し

合意の必要と困難

→ 不都合の余地を開く合意のメカニズム

## 参考文献

正村俊之(共編著),2013,『東日本大震災と社会学——大災害を生み出した社会』

ミネルヴァ書房

————(編著),2017,『ガバナンスとリスクの社会理論——機能分化論の視座から』

勁草書房

————,2018,『主権の二千年史』講談社選書メチエ